

## 適応の指標としての自己概念の研究\*

山形大学

椎野 信 治\*\*

### 問 題

Snygg と Combs (1949), Rogers によつて自我への現象学的接近が提唱されて以来, 行動理解あるいは行動予測における自己概念の重要性が強調されるようになった。とくに, Rogers (1954) は臨床的場面において, 治療過程が進行し適応がよくなるにつれて自己概念も変容することを示し, 実証的研究への端緒をひらいた。そこで用いられた適応の指標は理想自己と現実自己の分離 (discrepancy) であり, そのずれが大きいものは不適応の, 小さいものは応適の指標となるとした。その後, Bills (1951) はじめ多くの研究者によつてその有効性が認められているが, 一方, そのように単純な形でしかも一義的に適応との関係を扱うことに対する批判がある。その問題点を列挙すると, (1) 適応との関係は一義的あるいは直線的でなく曲線的である。すなわち, 一致の度合いのあまり高すぎる者も, 低すぎる者も問題がある。(2) 第1の点とも関係するが, 高い一致を示す者のなかに防衛的反應をするものがあり, 一致の高いものがみな適応がよいとはいえない。(3) 現象学的立場をとる人のなかにも, 理想自己と現実自己の不一致のみでなく, 有意な他者 (significant others) からどう見られているかということと現実自己の差も適応と密接な関係をもっているはずである。(4) 現象学的自己のみを扱つて, その客観性を問題にしていない, などである。しかし, これらの批判は理想自己と現実自己の不一致が適応の指標としてかなり有効なもので, 必要であるが必要十分ではないという立場からのものである。これらの問題点を考慮した研究も見られるが, それらの結果は必ずしも一致していない。

\* Studies on the self concept as the indices of the adjustment.

\*\* by Nobuji Shiino (Yamagata University)

本研究では, これらの批判のうち(3)の問題すなわち, 理想自己と現実自己の差異のみでなく, 現実自己と個人にとつて重要で有意な他者 (友人, 母, 父) が自分をどう認知しているかという他者自己との差異をも扱い, 適応との関係を検討する。なお, 自己概念測定 of 用具として, 最近, 長島ら (1966) が系統的操作を経て開発, 発展した自己記述 (Self-differential) 尺度を用いることにした。

### 諸種の自己概念間の差異得点と YG 性格検査得点との関係

#### 1. 目 的

現実自己 ( $S_p$ ) と理想自己 ( $S_I$ ) および友人・母親・父親から見られていると推測する自己 ( $S_F, S_M, S_{Fa}$ ) と4つの差異点と YG 性格検査の下位検査得点との関係を, 次の観点から検討する。すなわち, 第1に個々の差異点が YG 性格検査で測られた適応のいかなる領域と密接な関連をもつかということである。その場合の仮説は現実自己と理想自己の差のように自己内の分離と他者の文脈を導入した場合の他の3つの差異点とは適応の異なつた領域を反映するであろうということにある。第2にどの差異点が適応の指標として有効であるかということである。

#### 2. 方 法

被験者: 山形大学で心理学を受講している学生 55 名 (男 11 名, 女 44 名)

測定用具: 自己記述尺度 (大学生用 これは自己を記述する形容詞対38項目で構成され7段階評定をさせるようになっている [付表1])。ならびに YG 性格検査。

手続き: 自己概念の測定では, まず1枚の SD 尺度を被験者に配布し, 現実自己 ( $S_p$ ) についての評定をさせた。その際の教示は「見たままの自分あるいは現在の自分について尺度上のあてはまるところに○印をつけてく

ださい」ということであつた。評定が終つたら回収して、次に理想自己 ( $S_I$ ) について評定させた。理想自己については「こうありたいと思う自分あるいは理想の自分」について評定するように求めた。以下友人から見られた自己 ( $S_F$ ) 「なかのよい友だちはあなたのことをどのように思っていると推測するか」にもとづく評定、母親からみられた自己 ( $S_M$ ) 「母親はあなたのことをどう思っていると推測するか」にもとづく評定——母親がいない人は世話になつた祖母、伯叔母、姉でもよい——、父親からみられた自己 ( $S_{Fa}$ ) 「父親はあなたのことをどう思っていると推測するか」にもとづく評定——父親のいない人は祖父、伯叔父、兄でもよい——の順に同様の手続きで行なつた。実施期日は1965年5月10日。

YG性格検査は5つの自己概念測定を行なつて、1週間後に実施した。

結果の処理：4つの差異点は  $D_{PI}$ ,  $D_{PF}$ ,  $D_{PM}$ ,  $D_{PFa}$  と略記する。差異点の算出法は、 $D = \sqrt{\sum_{i=1}^n di^2/n}$  (各尺度について2つの概念間の差 ( $di$ ),  $n$  は尺度数) で定義する。したがつて、差異点の大きいものは自己概念間の不一致が大きく、より不適応であることが予想される。

Table 2 差異点の分布

差異の種類 差異の 得点の級間		$D_{PI}$		$D_{PF}$		$D_{PM}$		$D_{PFa}$	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
1	0.25 ~ 0.75	0	0	6	10.9	4	7.3	6	12.0
2	0.75 ~ 1.25	6	10.9	27	49.1	25	45.5	23	46.0
3	1.25 ~ 1.75	16	29.1	17	30.9	19	34.5	16	32.0
4	1.75 ~ 2.25	19	34.5	4	7.3	5	9.1	2	4.0
5	2.25 ~ 2.75	8	14.5	0	0	2	3.6	3	6.0
6	2.75 ~ 3.25	3	5.5	0	0	0	0	0	0
7	3.25 ~ 3.75	3	5.5	1	1.8	0	0	0	0
計		55	100.0	55	100.0	55	100.0	50	100.0
分布範囲		0.90 ~ 3.66		0.54 ~ 3.37		0.51 ~ 2.54		0.51 ~ 2.68	
平均		2.45		1.89		1.16		1.22	
SD		0.68		0.50		0.44		0.44	

$D_{PI}$ は平均が2.45で標準偏差は0.68,  $D_{PF}$ ,  $D_{PM}$ ,  $D_{PFa}$ などの他者自己との差異は平均が1.16~1.89で標準偏差は0.44~0.50である。 $D_{PI}$ は他の3つより差異が大きく、ちらばりも大きいことがわかる。また、差異点とYG得点の関係を検討する前に4つの差異点について、

各差異について、性差があるかどうかを検討したところ、Table 1のように4つとも、有意差が見られなかつた。

Table 1 差異点の性差の比較

	M 男		F 女		差	t	p
	M	SD	M	SD			
$D_{PI}$	1.76	0.57	1.99	0.65	-0.23	1.1029	n.s
$D_{PF}$	1.01	0.22	1.24	0.50	-0.23	1.4919	n.s
$D_{PFa}$	1.01	0.26	1.27	0.46	-0.26	1.6530	n.s
$D_{PM}$	1.06	0.28	1.33	0.43	-0.27	1.9706	n.s

そこで、男女をいっしょにしてのおおのの差異点ごとにその大きい者10名、小さい者10名を選び、YG得点の差をt検定によつて比較した。この場合、YG得点は粗点を5点法に変換したものをを用いた。次に55名について、各差異点とYG性格検査での因子得点との相関(Pearsonの積率相関係数)を求めた。

### 3. 結 果

4つの差異点の分布はTable 2に示すようである。

その大なる者10名と小さい者10名とを比較してみると、いずれもその差は1%水準で有意であつた (Table 3)。

次に、4つの差異点の差大群と差小群のYG下位検査得点の差をt検定した結果は、Table 4に示すとおりである。

Table 3 差異点の差大群・差小群の差の検定

差異の種類		群		差	t	p
		差大群 N=10	差小群 N=10			
D <sub>PI</sub>	M	0.30	1.14	11.5	12.92	<.001
	SD	0.40	0.17			
D <sub>PF</sub>	M	1.93	0.70	7.6	7.26	<.001
	SD	0.50	0.11			
D <sub>PM</sub>	M	2.01	0.78	7.6	11.81	<.001
	SD	0.28	0.14			
D <sub>PF2</sub>	M	1.88	0.73	7.13	7.28	<.001
	SD	0.46	0.14			

Table 4 D<sub>PI</sub>の差大・差小群のYG得点における比較

差異点	差大群		差小群		差	t	p*
	M	SD	M	SD			
D	3.5	1.20	2.4	0.80	1.1	2.277	<0.05
C	3.4	0.66	2.7	1.00	0.7	1.848	
I	3.5	0.50	2.8	0.60	0.7	1.617	
M	3.2	0.98	2.6	0.92	0.6	1.350	
O	3.3	0.78	2.3	0.90	1.0	2.520	<0.05
Co	3.3	0.57	2.7	1.19	0.6	1.116	
Ag	2.8	0.98	3.2	0.98	-0.4	0.864	
G	2.9	0.94	3.6	0.66	-0.7	1.827	
R	3.0	1.10	3.6	0.80	-0.6	1.332	
T	2.8	1.08	2.7	0.64	0.1	0.240	
A	3.6	0.80	2.2	1.07	1.4	3.822	<0.01
S	3.3	1.00	2.5	1.28	0.8	1.464	

\* two-tailed test

Table 5 D<sub>PF</sub>の差大・差小群のYG得点における比較

差異点	差大群		差小群		差	t	p
	M	SD	M	SD			
D	3.6	0.66	2.4	0.66	1.2	3.852	<0.01
C	3.4	1.02	2.5	0.67	0.9	2.21	<0.05
I	3.3	0.78	2.9	0.70	0.4	0.114	
N	3.6	0.36	2.7	0.90	0.9	2.403	<0.05
O	3.2	0.98	2.3	0.64	0.9	2.295	<0.05
Co	3.3	0.78	2.3	1.00	1.0	2.370	<0.05
Ag	3.1	0.70	2.4	0.66	0.7	2.184	<0.05
G	3.5	0.81	3.2	0.40	0.3	0.999	
R	3.1	0.71	3.2	0.60	-0.1	0.324	
T	3.2	0.40	2.6	0.69	0.6	2.250	<0.05
A	2.9	1.04	3.1	0.83	-0.2	0.450	
S	3.0	0.89	3.1	1.04	-0.1	0.219	

\* two-tailed test

Table 6 D<sub>PM</sub>の差大・差小群のYG得点における比較

差異点	差大群		差小群		差	t	p
	M	SD	M	SD			
D	3.2	0.60	2.5	0.81	0.7	2.10	<0.05
C	3.5	0.81	2.9	1.14	0.6	1.332	
I	3.3	0.78	3.1	0.70	0.2	0.570	
N	2.9	0.94	3.0	1.10	-0.1	0.207	
O	3.3	0.46	2.5	1.02	0.8	2.136	<0.05
Cb	2.9	0.70	2.5	0.92	0.4	1.032	
Ag	3.0	0.77	2.8	0.69	0.2	0.516	
G	3.4	1.02	3.5	0.81	-0.1	0.231	
R	3.4	1.28	3.4	0.80	0	0	
T	2.9	0.94	2.8	0.60	0.1	0.267	
A	3.0	0.77	2.9	0.83	0.1	0.264	
S	2.9	1.37	3.0	1.10	-0.1	0.171	

\* two-tailed test

Table 7 D<sub>PFa</sub>の差大・差小群のYG得点における比較

差異点	差大群		差小群		差	t	p
	M	SD	M	SD			
D	3.6	0.80	2.5	0.81	1.0	2.904	<0.01
C	3.4	0.92	2.9	1.04	0.5	1.08	
I	3.4	0.66	3.1	0.70	0.3	0.936	
N	2.9	0.94	2.7	1.19	0.2	0.396	
O	3.3	0.46	2.4	1.11	0.9	2.241	<0.05
Co	3.2	0.87	2.7	1.00	0.5	0.788	
Ag	2.7	0.90	2.7	0.90	0	0	
G	2.2	1.10	3.4	0.80	-0.1	0.222	
R	2.0	0.71	3.1	0.94	-0.1	0.255	
T	3.0	0.89	2.7	0.64	0.3	0.81	
A	3.5	0.92	2.8	0.87	0.7	1.659	
S	3.2	1.17	3.1	1.10	0.1	0.186	

\* two-tail test

D<sub>PI</sub>の大きいものは小さいものに比べて、D(抑うつ性)、O(主観性)、A(服従性)が有意に大きい。

同様にD<sub>PF</sub>ではD(抑うつ症)、C(気分変化大)、N(神経質)、O(主観性)、Co(非協調性)、Ag(攻撃性)、T(思考的内向性)で有意な差がみられた。

D<sub>PM</sub>ではD(抑うつ性)、O(主観性)が大きい傾向がみられる。

D<sub>PFa</sub>ではD<sub>PM</sub>と同じく、D、Oスコアに有意な差がみられる。

本研究の場合、4つの差異点の大きいものは抑うつ性、主観性を示す点は共通である。D<sub>PF</sub>は7つの領域で有意差を示したのは注目に値する。

Table 8 差異点とYG因子得点との相関係数

YG因子 D	情緒安定性 D, C, I, N	社会適応性 O, Co, Ag	衝動性 G, R	内省的 R, T	主導性 A, S
DPI	n=55 r=0.367**	n=55 r=0.188	n=55 r=-0.256	n=55 r=-0.102	n=55 r=0.322*
DPF	n=55 r=0.372**	n=55 r=0.340*	n=55 r=-0.035	n=55 r=-0.095	n=55 r=0.020
DPM	n=55 r=0.299*	n=55 r=0.299*	n=55 r=-0.090	n=55 r=-0.089	n=55 r=0.109
Dpfa	n=50 r=0.343*	n=50 r=0.318*	n=50 r=-0.209	n=50 r=-0.203	n=50 r=0.228

さて、差異点とYG性格検査での適応との関係をもつとはつきりさせるために、おのおのの差異点とYG性格検査の各因子得点との相関を見てみよう (Table 8)。

DPI は情緒安定性、主導性と有意な相関をもっている。すなわち、DPI が大きい者ほど、情緒不安定で非主導的であるということである。DPF, DPM, Dpfa はともに情緒安定性、社会適応性と有意な相関がみられる。具体的には、これらの差異点が高い者ほど情緒不安定で社会的不適応を示すことがわかる。こう見てくると、4つの差異点は共通に情緒不安定性の指標であり、DPI はその他に非主導性、他の3つは社会的不適応の指標となつている。

#### 4. 考 察

4つの差異点は抑うつ性、主観性の点で敏感であつた。もつと大きい分類項目でいうと、すべて情緒性に関する適応の指標としての意味をもっているといえよう。このうちで DPI が自由連想検査でみた情緒性と密接な関係をもっているということは、Robert (1952) によつてすでに指摘されているが、対人関係を前提とする他者自己と現実自己の差も情緒性に影響をもっているということは興味深い。理想自己は自己の発展の目標、あるいは要求水準というかたちで自己を規定しているため、現実の自己像とのずれがあるという知覚は自己に対する不満となり、一方、日常場面で、有意味な関係をもっている他者が自分のみているように見えていないという知覚は将来起こるかもしれない障害に対する不安感をひきおこしやすいからであろう。DPI は情緒性の他に非主導性の指標ともなつている。DPF, DPM, Dpfa はともに情緒性の他に社会的不適応と密接な関係をもち、これは情緒性の場合と異なり、社会的不適応の諸行動が差異点の増大をもたらしていると考えられる。このように DPI と他の3つの差異点は異なつた適応領域を示すと解釈して

よかろう。したがつて、長島 (1962) も主張するように適応の指標としては DPI のみでは不十分で、有意な他者がどう自分をみているということと現実自己のずれをも導入することによつて、適応の予測の精度は増大するといえる。

本研究の4つの指標のうちで、DPF がYG性格検査で最も多く7つの有意差を示している。これは被験者が大学2年生であり、比較的閉鎖的な大学での公私にわたる友だちとの交際がその生活および人格形成に重要な役割りをはたしているため、現実自己 (SP) と友人自己 (SF) との不一致は、そのまま個人的・社会的適応に結びつくためではないかと思われる。

#### 精神分裂病者と大学生とにおける差異点の比較

##### 1. 目 的

ここでは4つの差異点について、精神分裂病者と大学生の間の差を比較するが、一般に精神分裂病者の方が大学生より差異点は大であると思われる。また、両群の弁別においてどの指標が有効であるかという点と、さらに自己記述尺度の下位尺度を構成する6つの因子のいずれにおいて両群を弁別しているかを分析することを目的とする。

##### 2. 方 法

被験者：精神分裂病者として、山形市、上山市の精神病院に入院加療中の者で検査可能な状態にあつた男性22名。このうち、資料に欠損部のあつた者10名を除いて12名を分析の対象とした。大学生被験者は先に用いた山形大学生55名のうち12名を無作為に抽出した。

測定用具：先に用いた自己記述尺度38項目。これは因子分析の結果6つの因子に分かれている。第I因子 (意欲性、強じん性因子) 10項目、第II因子 (情動安定性因

子) 10項目, 第三因子(社会性因子) 8項目, 第四因子(敏感性因子) 4項目, 第五因子(緊張性因子) 4項目, 第六因子(理知性因子) 3項目。このうち1項目はV, VI因子に同時に属している(長島貞夫ほか, 1966)。

手続き: 大学生については, 先に述べたとおりであるが, 精神分裂病者に対しては病院へ関係している臨床心理学者がよく説明し, 動機づけながら, 自己記述尺度に反応させた。施行順序は  $S_P, S_I, S_F, S_M, S_{Fa}$  の順であった。実施は1965年9月6日~10日になされた。

結果の処理: 先と同様にして,  $D_{PI}, D_{PF}, D_{PM}, D_{PFa}$  の4つの差異点を算出し, さらに6つの因子についても含まれる項目数を考慮して, 差異点を算出した。これらの差異点について精神分裂病者と大学生の間の差の有意性をも検定によつてみた。

### 3. 結果

精神分裂病者群と大学生群の差異点の平均を比較した結果は, Table 9~12 に示すとおりである。例外なく, 精神分裂病者群の方が大きい値を示している。個々の差異点について見ていくと,  $D_{PI}$  は全項目で有意な差が見られる。因子毎に見ると  $F_1$  (意欲性, 強じん性),  $F_2$  (情動安定性),  $F_3$  (社会性),  $F_4$  (敏感性) は1%水準

Table 9  $D_{PI}$ における分裂病群・大学生群の比較

	分裂病群 N=12		大学生 N=12		差	t	p*
	M	SD	M	SD			
全項目	2.021	0.470	1.343	0.294	0.678	4.06	<0.01
$F_1$	2.170	0.674	1.226	0.809	0.944	2.979	<0.01
$F_2$	2.004	0.740	1.229	0.487	0.775	3.016	<0.01
$F_3$	1.599	0.475	1.014	0.430	0.585	3.031	<0.01
$F_4$	2.068	0.625	1.098	0.436	0.970	4.217	<0.01
$F_5$	1.850	0.569	1.306	0.435	0.544	2.519	<0.05
$F_6$	2.062	0.614	1.651	0.638	0.411	0.576	n.s.

\* one tailed test

Table 10  $D_{PF}$ における分裂病群・大学生群の比較

	分裂病群 N=12		大学生 N=12		差	t	p*
	M	SD	M	SD			
全項目	1.411	0.506	1.054	0.373	0.357	1.61	n.s.
$F_1$	1.484	0.698	0.994	0.431	0.490	1.984	<0.05
$F_2$	1.432	0.720	1.076	0.547	0.356	1.294	n.s.
$F_3$	1.134	0.627	0.970	0.560	0.164	0.649	n.s.
$F_4$	1.436	0.795	0.913	0.457	0.513	1.853	<0.05
$F_5$	1.009	0.525	0.773	0.507	0.236	1.072	n.s.
$F_6$	1.265	0.413	0.875	0.715	0.390	1.566	n.s.

\* one tailed test

で有意であり,  $F_5$  (緊張性) は5%水準で有意である (Table 9)。 $D_{PF}$  は全体として差がないが,  $F_1, F_4$  において有意差がある (Table 10)。 $D_{PM}$  も全体として差が見られず, 因子別では,  $F_1$  に傾向が見られ,  $F_6$  で有意差がある (Table 11)。 $D_{PFa}$  は全体として有意差がある。因子別では  $F_1, F_2, F_5, F_4$  の4つにおいて有意差がある (Table 12)。

Table 11  $D_{PM}$ における分裂病群・大学生群の比較

	分裂病群 N=12		大学生 N=12		差	t	p*
	M	SD	M	SD			
全項目	1.439	0.551	1.134	0.313	0.305	1.59	n.s.
$F_1$	1.512	0.621	1.094	0.365	0.418	1.900	<0.10
$F_2$	1.379	0.741	1.121	0.429	0.258	0.989	n.s.
$F_3$	1.190	0.580	0.996	0.449	0.194	0.866	n.s.
$F_4$	1.260	0.966	0.946	0.614	0.314	0.937	n.s.
$F_5$	1.399	0.757	1.195	0.635	0.204	0.685	n.s.
$F_6$	1.503	0.340	1.018	0.602	0.485	2.277	<0.05

\* one-tailed test

Table 12  $D_{PFa}$ における分裂病群・大学生群の比較

	分裂病群 N=12		大学生 N=12		差	t	p*
	M	SD	M	SD			
全項目	1.437	0.485	1.067	0.208	0.370	2.38	<0.05
$F_1$	1.531	0.728	1.066	0.312	0.465	1.946	<0.05
$F_2$	1.424	0.563	1.048	0.397	0.376	1.907	<0.05
$F_3$	1.140	0.374	1.023	0.304	0.117	0.810	n.s.
$F_4$	1.499	0.648	0.778	0.479	0.721	2.970	<0.01
$F_5$	1.333	0.655	0.938	0.379	0.395	1.736	<0.05
$F_6$	1.429	0.471	1.117	0.707	0.313	1.211	n.s.

\* one-tailed test

### 4. 考察

4種の差異点について精神分裂病者と大学生の弁別力を検討してみよう。 $D_{PI}$  は6つの因子のうち5つにおいて大きな弁別力を示している。 $F_1$  は意欲性, 積極性, 強じん性を示す因子で,  $F_2$  は幸福感, あたたかさ, 情動安定性など,  $F_3$  社会性と命名されているが, 向性, まじめさ, 地味などを示し,  $F_4$  は敏感性,  $F_5$  は緊張性を示すのであるが上の結果は, Friedman (1955) や Wochel and Hillson (1957) の結果と一致しない。かれらは, 正常者群と神経症者群と精神分裂病者群との  $D_{PI}$  (かれらは  $D_{SI}$  としている) を比較して, 正常者群(大学生群)と神経症者群とは有意な差があるが, 正常者群と精神分裂病者群とは有意差が得られなかつたとしている。精神分裂病者群では現実自己を高く評定し, 理想自己につ

いては低く評定するという防衛型 (defense patterns) によつてそのような結果がもたらされるものとしている。本研究の結果は Table 9 に示したとおり大学生と分裂病患者との間に有意差が見られるがどうしてであろうか。考えられる原因としては本研究の分裂病患者群は、軽症者または治療が進み回復過程にあり、神経症者状態にあつたのではないかと、などがあるが、結論については今後のいつそ厳密な手続きによる研究にまつこととしたい。

D<sub>PFa</sub> も F<sub>1</sub>, F<sub>2</sub>, F<sub>4</sub>, F<sub>5</sub> の4つの因子において、両群を弁別しているが、F<sub>3</sub> では有意差が見られない。先の研究ではあまり適応との関係は顕著でなかつたことから考えると一見奇異である。この差は分裂病患者群において、不適応の生起に父親が一因となつていことを意味しているのかもしれない。これらの被験者が男性であることはその点で興味があるが、これを証する資料が乏しいので断定することは控えたい。

D<sub>PM</sub> と D<sub>PF</sub> では両群に差が見られなかつた。因子別に見ると、D<sub>PM</sub> は F<sub>3</sub> (理知性) で有意差があるが、これは解釈しないで指摘するにとどめておく。

これらから、本研究に用いられた被験者群の場合には、D<sub>PI</sub> が最も有効で、ついで D<sub>PFa</sub> が有効な適応の指標となることはいえよう。先の研究のように普通の大学生のなかでの適応の指標であると思われた D<sub>PF</sub> は分裂病患者と大学生の比較の際には有効でない。

因子ごとでは F<sub>1</sub> (意欲性, 強じん性), F<sub>4</sub> (敏感性) は差異点の種類にかかわらず、両群の弁別に有効であるといつてもよからう。

### 総合的考察：結論と今後の問題

理想自己と現実自己の不一致は適応の指標として有効であるが、その他に有意味な他者に認知されていると思う自己と現実自己の差も適応と重要な関係を持つという観点から、4種の差異点と適応との関係を検討した。まず、最初は、大学生被験者を用い、4つの差異点のうち、D<sub>PF</sub> が最も有効で敏感な適応の指標となることが認められたが、次の精神分裂病患者と大学生とを比較した場合には D<sub>PI</sub> が最も弁別力がよく、D<sub>PFa</sub> もかなりの弁別力を示した。しかし D<sub>PF</sub> はほとんど両群の弁別に寄与していない。このことから、D<sub>PF</sub> は青年期にあり、しかも大学のような閉じられた社会に生活する人びとの適応の予測にのみ有効であることを示すといえよう。D<sub>PM</sub>, D<sub>PFa</sub> はより低年齢の場合に有効であると思われる。調べようとする人にとってどの程度有意味であるかによつて、指標としての有効性は左右されるようである。

いずれにしても、D<sub>PI</sub>のみを適応の指標とすることは不十分であり、D<sub>PF</sub>, D<sub>PFa</sub> とともに用いていかなければ、情緒適応, 社会適応, その他広い領域での適応を予測することはできない。本研究では他者自我を導入して適応との関係を検討したわけであるが、現象学的わく組みをのりこえて、客観的, 外的条件と現実認知のずれも適応に少なからぬ影響をおよぼすと考えられる。たとえば、個体の属する集団成員あるいは有意味な他者の見た個人の姿, TAT などに投影された自己像とのずれなどである。これらも考慮に入れていくことが必要であろう。この線に沿つた研究もすでに行なわれているが、(Friedman, 1955) 適応の指標の追求は古いようで新しい問題であり、一貫した結果は得られたとはいえないのが現状である。測定用具の改良, 方法論的検討がなされたいうえで、経験的, 実証的研究が積み重ねられていくべきである。

### 要 約

現実自己と理想自己の差 (D<sub>PI</sub>) だけでなく、現実自己, 他者自己 (友人, 母, 父から見られていると思う自己) との差 (D<sub>PF</sub>, D<sub>PM</sub>, D<sub>PFa</sub>) も考慮すべきであるとの観点から、2つの研究を行ない、適応の指標としての有効性, 各差異点の関連する適応領域について検討した。なお自己概念の測定には長島貞夫らにより開発された自己記述 (Self-Differential) 尺度を用いた。最初は大学生を対象として、YG性格検査得点に関して、差異点の大小群の比較をした。4つとも情緒性の指標となり、加えて D<sub>PF</sub>, D<sub>PM</sub>, D<sub>PFa</sub> は社会的適応の指標となつた。なかでも D<sub>PF</sub> は最も多くの適応領域と有意味な関係があつた。次には、精神分裂病患者群と大学生群の比較を行ない、D<sub>PF</sub>, D<sub>PFa</sub> が両群を敏感に弁別することを見出した。とくに D<sub>PI</sub> は因子の5つにおいて弁別した。しかし、これは従来の結果と矛盾しているが、その正確な説明は保留された。この比較では D<sub>PF</sub>, D<sub>PM</sub> はあまり有効ではなかつた。第1因子 (意欲性, 強じん性), 第IV因子 (敏感性) は両群の弁別により有効である。以上の結果から、正常者内の比較の場合と正常者と精神分裂病患者間の比較の場合では適応の指標としての有効性が異なるが、いずれにしても、D<sub>PI</sub>のみでなく他者自己とのずれを併用することは、広い適応領域にわたる有効な予測を可能にすることが結論された。

今後の問題についても若干触れた。

付表1

氏名 \_\_\_\_\_ 性別 男 女 生年月日 昭和 年 月 日 学校 \_\_\_\_\_ 検査年月日 昭和 年 月 日

内のことで、次の38項目について例のごとくに自分でもっとも当てはまるところに○印をつけてください。

たとえば、健康である 

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

 病気がちである、にかなり健康と思うとき

は例のごとくに○印をつけるのです。

なお、これはあなた個人を調べるためではなく、一般的な心理学の研究のためのものですから、あなたの思いありのまま答えてください。

- |            | と<br>とも                  | か<br>なり                  | や<br>や                   | ど<br>もわ<br>い<br>ち<br>な<br>ら<br>な<br>い | や<br>や                   | か<br>な<br>り              | と<br>とも                  |       |            |                          |                          |                          |                          |                          |                          |                          |                          |        |
|------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|---------------------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|-------|------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------|
| 1. 物覚えのよい  | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 忘れっぽい | 20. せっかちな  | <input type="checkbox"/> | のんびりした |
| 2. かたい     | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | やわらかい | 21. 強い     | <input type="checkbox"/> | 弱い     |
| 3. 個性のない   | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 個性的な  | 22. 臆病な    | <input type="checkbox"/> | 勇敢な    |
| 4. 不活発な    | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 活発な   | 23. 冷静な    | <input type="checkbox"/> | 情熱的な   |
| 5. 敏感な     | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 鈍感な   | 24. 感情的な   | <input type="checkbox"/> | 理性的な   |
| 6. 厳しい     | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 優しい   | 25. にぎやか   | <input type="checkbox"/> | 静かな    |
| 7. 明るい     | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 暗い    | 26. でしゃばりな | <input type="checkbox"/> | ひかえめな  |
| 8. 不安定な    | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 安定な   | 27. 幸福な    | <input type="checkbox"/> | 不幸な    |
| 9. 卑屈な     | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | おおらかな | 28. 不誠実な   | <input type="checkbox"/> | 誠実な    |
| 10. 暖い     | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 冷い    | 29. 積極的な   | <input type="checkbox"/> | 消極的な   |
| 11. 病弱な    | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 元気な   | 30. 内面的な   | <input type="checkbox"/> | 外面的な   |
| 12. 気持悪い   | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 気持よい  | 31. 軽卒な    | <input type="checkbox"/> | 慎重な    |
| 13. 地味な    | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 派手な   | 32. 安らかな   | <input type="checkbox"/> | 不安な    |
| 14. おしゃべりな | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 無口な   | 33. 不注意な   | <input type="checkbox"/> | 注意深い   |
| 15. 不真面目な  | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 真面目な  | 34. 丸い     | <input type="checkbox"/> | 角のある   |
| 16. 清潔な    | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 不潔な   | 35. 意欲的な   | <input type="checkbox"/> | 無気力な   |
| 17. こまかい   | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 大まかな  | 36. 楽しい    | <input type="checkbox"/> | 苦しい    |
| 18. 強気な    | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 弱気な   | 37. 頼りない   | <input type="checkbox"/> | 頼もしい   |
| 19. 深い     | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>              | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 浅い    | 38. きちんとした | <input type="checkbox"/> | だらしない  |

## 文 献

- Bills, E. R., & Mc Lean O. 1951 An index of adjustment and values. *J. Consult. Psychol.*, 15, 257-261.
- Friedman Ira, 1955 Phenomenological, ideal and projected conception of self. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 51, 611-615
- 長島貞夫 1962 操作的方法による自我の心理学的研究  
野間教育研究所紀要 第21集
- 長島貞夫他 1966 自我と適応の関係についての研究  
(I) —Self-differential 作製の試み— 東京教育大学教育学部紀要 第12巻
- Robert G, E, 1952 A study of validity of the index of adjustment and values. *J. consult. Psychol.*, 16, 302-304.
- Rogers, C, R, & Dymond, K, F. 1954 *Psychotherapy and personality change*. University of Chicago Press.
- Snygg, D. & Combs, A. W. 1949 *An new frame of reference for psychology*. New York, Harper.
- Wochel, P. & Hillson, J. S. 1957 Self-concept and defensive behavior in the maladjusted. *J. consult. Psychol.*, 11, 81-88

(1966年3月10日原稿受付)